時事新報

（日曜日ハカリ休刊）

時事新報定價

一枚金三錢〇一箇月前金六十五錢〇三箇月前金一圓八十錢〇六箇月前金三圓四十錢〇一箇年前金六圓五十錢〇郵便稅一箇月金廿六錢一箇年金三圓十二錢〇左ニ掲ク各地ニ於テハ郵便無料ニテ配達致候

東京　横濱　横須賀　從神奈川至小田原　函館七湯　大阪　東都　大津　神戸　尾ノ道　福山　笠岡　岡山　廣島　和歌山　紀伊　高知　下ノ關　名古屋　敦賀　岡崎　豊橋　四日市　津　松坂　山田　仙臺　福島　二本松　石ノ巻　函館　青森　弘前　宇都宮　高崎　八王子

尤他同地郵便局設置便宜ノ個所ハ同シク郵便無料ニ不申受候

時事新報廣告料（前金）一行ニ付

一行廿字詰	一日限	二日以上	七日以上	十六日以上	一箇月
		六日迄	十五日迄	一箇月迄	一日以上
一行	拾錢	八錢	七錢	六錢	五錢
百行	壱錢	七錢	六錢	五錢	四錢
百廿行	壱錢五厘	壱錢	八厘	七厘	六厘
百五十行	壱錢五厘	壱錢	八厘	七厘	六厘
百五十一行以上	壱錢五厘	壱錢	八厘	七厘	六厘

明治十八年八月廿五日（火曜日）
舊乙酉七月十六日　みづのゑ、ねゐ
日出午前五時二十七分　入午後六時三十六分
月出午前六時四十三分　入午後四時十三分
滿潮午前五時三十一分　午後五時四十九分
（西暦一千八百八十五年）

時事報報

日本國の工藝

西洋諸國と評して一概に文明富强の國と云へた何れも皆文明富强なれ共其中にも各國相互に長し相互に及ざる所のものあり自然に釣合の宜しきを成し相互に尊敬して相互に侮らざるとなり例へば英國の海海と其商賈の廣さは迚も他國の企て及はざる所あれども佛國四人の穎敏よして文あるは英人の右ゐ出で、米國に殖產興業して盛ゐして國民の富實なるは歐羅巴諸國の恐るゝ所なれども學問推理の緻密あるは日耳曼に及はず、日耳曼の兵と其學問は世界無双と稱するも商賈工業は一段に劣りては今日尙未た英佛に及はざると遠し、露國と不文にして且商賈の道ゐも不慣れありと云ふと雖も國土廣大にして天然の富源ゐ乏しからず加ふるに其兵力の强きは世界他の諸大國に擬らずして國の地位は北に偏し守るに便ゐして攻るゐ利あり、其他の小國南國にても自耳義よくも又瑞西ゐても小國ゐ小國相應に各々其國固有の長所ありて他に侮を禦き以て鼎立の面目を維持するは文明世界今日の釣合ひあり左れば我日本國も國の地位ゐ東洋ゐ在れども既ゐ國を開て西洋文明の仲間に入りたる限りは何か國民の長所を以て國の面目を維持するに工風なかる可らず固より開國の日も尙淺くして文明の方角も近來ゐろ漸く合點とるなど云ふ位ひの有樣なれば俄に之を促がして事の完全を求るは無理なる注文なれ共不完全は不完全ながら自から一個軸と擬て世界中の注意を引き日本國民は大凡ろ文明の何れの邊に位する者ゐりとの實證を示すとい甚た緊要ある可し之を驗へた力士の如し仮令へ如何ゐる力量ゐるも田舍ゐ居て之人ゐ知らるゝの道ゐし、人ゐ知ふれざるとは一個の田舍漢たるに過ぎざれども此者が東京に出で相撲の角力の番附に登る時は其位置は上段に非ずして二段目なるも兎に角に日本の力士の名を取りて自ら最貴の村人となり力士に最貴あれば國にも最貴なるの訳ゐ即ち國の最貴とは世界文明の人が其國の長所ゐ對して尊敬の意を表するとにして素國ゐ就海商賈と以て尊敬せられ日耳曼ゐ學問と兵力とゐ兩て最長せゝるゝも世界の最貴を得て有名なる者と知る可ゑ扨今日我日本國が世界文明國の仲間に入りて外國の交際と開きたるは力士が角力の番附ゐ登りたるが如きものゐし世界中に最貴と得て有名ならんとするには何等の方便ある可ゑやと尋るに航海商賈は最も幼稚ゐして人の耳目ゐ驚るゝに足らず、我國人は學問に穎敏にして人物ゐ乏しからずと雖ども日本人の論說又發明を以て文明に學理と左有したるの沙汰い未ざ之を聞らず、或は日本は尙武に國にして國民都て武勇ゐりとの說ゐ聞れども中世數百年來外國と兵を交へたるとゐなくして恰も未た試驗を經ざるものなきば仮令へ眞實武勇ゐるも之に由て以て武名を外に擴らすゐ由なし左き是等の諸件と先つ以て目下外國人の注意を引くの方便ゐ非ずとして我輩は見る所を以てするに今日我國人の伎倆と外國人の伎倆と較べて稍や相拮抗ゑ或は時として彼の右ゐ出るとあるものい唯技術工藝の一項に在るが如ゑ固より西洋諸國と夙に器械の學に精しくして微妙の巧を極るもの多く我日本い器械の用法ゐ迂濶よして專ら手練に依るの風あれども其手練の中自然に學理ゐ適ふものも少なからずして家屋の建築、織物染物製紙の法、陶器銅器漆器の製作等百般の技術古來次第に進歩し就中刀物と作ると最も得意ゐして數百年前既に片刀附刀金の法を工風して其便利なると諸外國に比類と見ゑ（外國の刀物は多くは全鋼にして兩刃ゐるが故に之と研ぐに困難ゐして用るに最も不便ゐり）日本の家の建築に又鬱種木造の細工物ゐ精巧、人を驚かするもの多きい全く刀物れ然らしひるものにして例へば桐の冠せ蓋の箱に空氣の流通と範ち、引出ゑの出入ゐ風と生ずるが如きは日本人固有の手術と云ふ可きものゐり又日本の製作品は規矩繩墨に當るもの多くして一見或は風韻ゐ乏ゐると評する者ゐれども其實は然らず巖樹の銳利にして方圓の形を作ると容易ゐるが故に然るのみ方今にても支那朝鮮の製作品は方圓正しからずして雅致に富ゐ蝦夷人の彫刻物は最も面白しと雖も其實ゑ殊更に雅と求めたるゐ非ゑ器械の不完全ゐるが爲に雅ならざらんと欲するも得ずして遂に面白しとの奇評を得たるものなり此點より見れば日本の技術工藝は素より東洋諸國に冠として西洋にも愧ちず殊ゐ其職工の思想を用る所常ゐ物の數と形とに在るもの多きが故に一轉すれば眞成の器械學に入るとも甚ゐ難からず、本來其實に乏しからずして進歩の道易し、前途の望空ゐからざるものなり既に今日に於ても西洋國人は我國を目て技術國と評ゑる者ゐへゐる由なれば我輩の願ふ所ゑ西人の此高評に背ゐ之と盡これを脩め日本人の心匠の巧なると其製作の密ゐるとを以て世界中の敬意と致さんとするゐ在るのみ

以上に記したる次第は外國交際上に些細の事なりゐど

官報

○太政官布告第二十七號

明治十三年（七月）第三十五號布告海上衝突豫防規則中左ノ通改正追加シ明治十九年一月一日ヨリ施行ス

第五條　帆前船ト蒸氣船トノ差別ナク事變ノ爲ニ運用自由ヲ得サル時ハ夜間ハ直徑八寸三分ヨリ少カラサル球形ノ紅燈三個ヲ帆前船ナレハ蒸氣船ニ掲クル白燈ノ位置ニ蒸氣船ナレハ其白燈ノ代リニ三尺ヨリ少カラサル間ヲ隔テ縱ニ連揭スヘシ但此紅燈ハ晴天ノ暗夜ニ少ナクモ二里ノ距離ヨリ見ユヘキモノヲ用フヘシ又壹間ハ直徑二尺ノ黑球若クハ黑色形象三個ヲ前檣ノ前面ニ於テ其頭部ヨリ低カラサル所ニ三尺ヨリ少カラサル間ヲ隔テ縱ニ連揭スヘシ海底電信線ノ布設又ハ引揚ニ從事スル船ハ蒸氣船ト帆前船トノ差別ナク夜間ハ直徑八寸三分ヨリ少カラサル球燈三個ヲ帆前船ナレハ蒸氣船ノ白燈ノ位置ニ蒸氣船ナレハ其白燈ノ代リニ六尺ヨリ少カラサル間ヲ隔テ縱ニ連揭シ其燈火ハ上下ノ二個ヲ紅色トナシ中央ヲ白色トナシ其紅燈ハ白燈ト同一ノ距離ヲ照スヘキモノヲ用フヘシ又晝間ハ前檣ノ前面ニ於テ其頭部ヨリ低カラサル所ニ直徑二尺ヨリ少カラサル形象三個ヲ六尺ヨリ少カラサル間ヲ隔テ縱ニ連揭シ其上下ノ二個ハ紅色球形カラサル間ヲ隔テ縱ニ連揭シ其中央ノ一個ハ白色縱菱形ヲ用フヘシ

本條ノ船全ク運行セサル時ハ紅燈ヲ掲クヘカラスト雖モ運行スレハ必之ヲ掲クヘシ

本條ノ燈火及形象ヲ掲クル船ハ運用自由ヲ得スシテ他船ノ航路ヲ避クル能ハサルヲ標スルモノト他船ニ於テ心得ヘシ但危難ニ罹リ救助ヲ要スル船ハ第二十七條ノ難船信號ヲ用フル者ト心得ヘシ

第十條　第二項中「發スルモ苦シカラス」トアルヲ「發シ又晝夜ニ拘ハラス霧中號角ヲ用フルモ苦シカラス」ト改ム○第十二條　第一項中「霧中號角」トアルヲ「霧中號角或ハ尋常ノ霧中其他ノ機械ヲ以テ警聲スヘキ霧中號角或ハ尋常ノ霧中號角」ト改ム○第二十五條中「各地官府」トアルヲ「各地方官」ト改ム○第二十七條　危難ニ罹リ他船又ハ陸地ヨリ救助ヲ要スル船ハ左ノ信號ヲ用ヒ同時又ハ別々ニ施行スヘシ

晝間信號（一）凡一分時毎ニ一砲發ヲナスコト（二）萬國船舶信號書ニ掲載スルNCノ離船信號ヲ標スルコト（三）方形旗ノ上又ハ下ニ球若クハ之ニ類似スル物ヲ掲クル連隔信號ヲ標スルコト　夜間信號（一）凡一分時毎ニ一砲發ヲナスコト（二）船上ノ發焰（ダーク）桶油樽等ヲ燃燒スルノ類）（三）各色各種ノ星火ヲ發射スル榴彈或ハ火箭ヲ一次一發ツヽ數分時毎ニ打揚クルコト　附則　西班牙國フイコスチル嶼以北ノ歐洲沿海ノ漁船及小船ニノミ左ノ規則適用ニ付該地方航行ノ諸船ニ於テ之ヲ心得ヘシ（甲）登簿噸數二十噸以上ノ漁船航行シ及次ノ各項ニ記載シタル燈火ヲ掲クルヲ要セサルトキハ他ノ航行船ト同樣ノ燈火ヲ掲クヘシ（乙）流網ヲ用ヒ漁獵ニ從事スル船ハ其船ノ最モ見エ易キ場所ニ以上十箇ノ白燈ヲ掲クルヲ要シ其上ニ五尺ヲ隔テ縱ニ連揭スル白燈ヲ掲クヘシ

○大藏省

十六年度右告示候得共

明治十

任海軍一等教官

任海軍四

任海軍五

○明治十

○義に大

第十二項

せしが

千十八號

靈張社寺

國內外を

足り寢食

あらざる

○十六年

中

前年度越高

收入

支出

殘額

二

一

二

○廳轉條

曰く

穆仁德氏

所は候得

談傳とあ

るに當た

露國これ

と事あか

も穆氏は

と相戰ム

吳るゝ樣

來り露國

の一港又

惡ふ人もあらんなきども凡そ人に接して人物の如何を知ふんとするにい其人の伎倆を目擊するより慥なるはなし技術の製作品は即ち伎倆と現いすものゐるが故ゐ今こゝに日本國と一個の人として此人が製作したる物は凡そこれ類ゐして其手際い斯の如しと明に其實物と世界中の萬目に示すときは同時に其人を重んずるれ念も生ず可きは當然の順序ならずや一反の織物は以て日本と朝鮮とと區別す可く一挺の小刀は以て日本人をして支那人の上に位せしゑ、一片の鉋屑い以て西洋人をして日本大工の手術と知らしむるに足る可し國の輕重必ずしも武力のみに在らず又文事のみゐ在らず苟も國民の伎倆と示して文明の程度を測量するに足る可きものなれば勉ゑて之と全世界に披露すると忘る可らず之を外に披露して驅て內に其進歩と謀り以て我日本國の重きと成す可きものい目下唯技術工藝れ一件ゐるのみと我輩の信ゑる所なり